



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第30号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2012-07-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73564
Type	journal
File Information	DRFmonthly_30.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

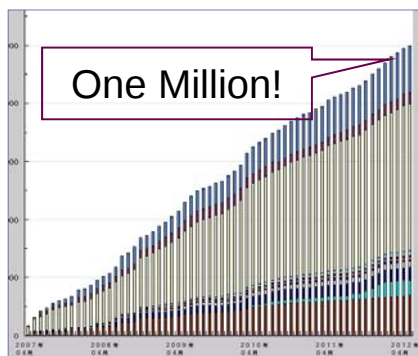
第30号

No. 30 July, 2012

【特集1】 機関リポジトリ本文ありコンテンツ100万件突破！

【特集2】 平成23年度CSI 委託事業（コンテンツ系）報告交流会レポート

【特集1】 機関リポジトリ本文ありコンテンツ100万件突破！

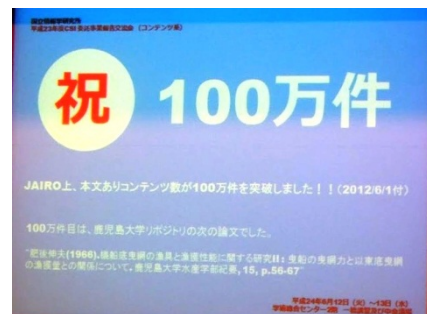


IRDB <http://irdb.nii.ac.jp/analysis/index.php>

2012年6月1日

日本の機関リポジトリによって
オープンアクセスになった文献
が100万件を突破しました！

喜びの声、祝福コメントなどをお届けします。



平成23年度CSI委託事業報告交流会
でも紹介されました

100万件目の本文ありコンテンツは…

鹿児島大学リポジトリに登録された『鹿児島大学水産学部紀要』所収論文「機船底曳網の漁具と漁獲性能に関する研究II：曳船の曳網力と以東底曳網の漁獲量との関係について」でした。著者の肥後伸夫名誉教授（平成23年ご逝去）と一緒に水産学部附属練習船で海洋生物の調査を行ったこともある野呂忠秀鹿児島大学附属図書館長（前水産学部長）から喜びのコメントを頂きました。

「フィールド調査を重視し、鹿児島県内の海底を誰よりも知り尽くしていた肥後先生は、自ら海に潜って調べたデータに基づいたエビデンスを論拠に研究や社会的な貢献を行っていました。鹿児島大学では研究者が苦労して解明したエビデンスに基づいた地域貢献を行っていくことが必要と考えています。研究者の論文やデータは後世に残ります。企業が保持する膨大な量の緻密なデータも含め、人類の知的財産であるこれらのデータを一部の人のみが占有するのはアンフェアであり、必要な人だれもがアクセスできるような仕組み作りが図書館の使命です。」



海洋調査中のボートで学生とともに
（右が肥後名誉教授）

鹿児島大学リポジトリ



CSI 報告交流会でも話題になりました！

100万件…あまりに多い数字で、具体的にイメージできないです。でも、リポジトリを運用してこられた皆さんの積み重ねの成果で、本当にすばらしいことだと思います！本学はこの夏に仮公開予定なので、本学リポジトリのコンテンツもJAIRO から利用されるようになると思うと、楽しみです。＜谷本千栄（神戸市外国語大学）＞

皆様のご尽力により本文コンテンツ100万件突破おめでとうございます。本当に微力ではありますが、本学もIRをたちあげずかでも貢献できたことうれしく存じます。まだまだ一里塚へん（のあたり）かと思いますので、継続して努力したいです。＜芝野朋子（龍谷大学）＞

おめでとうございます。本学もせっせと登録をがんばります！＜寺島陽子（奈良女子大学）＞

100万件突破のニュースを海外のメーリングリストに流したところ、世界各地から「おめでとう」「すごい」などの祝福コメントが届き、Library Journalの「Infodocket」でも取り上げられました。

【特集2】平成23年度CSI 委託事業報告交流会（コンテンツ系）レポート

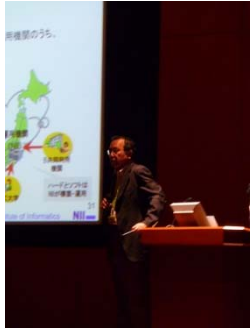


平成24年6月12日と13日の2日間に渡り、国立情報学研究所が主催する平成23年度CSI 委託事業報告交流会が学術総合センターにて開催されました。「機関リポジトリの新たなステージに向けて」というテーマのもと、委託機関を中心にこれまでの活動成果の報告や、将来への展望についての活発な情報共有が行われました。特集2では本報告交流会の様子をレポートします。



DRF 取材班に同行して登壇者のみなさまからコメントをいただきました♪

Session.1 CSI委託事業を振り返る



国立情報学研究所の安達学術基盤推進部長より「学術機関リポジトリ構築連携支援事業の7年を振り返る」と題し、CSI 委託事業の概要、成果、課題、今後の方向性についてお話がありました。CSI 委託事業が実地された7年間に、機関リポジトリの構築機関は地域共同リポジトリも含めると249機関となり、登録件数もついに100万件を突破しました。平成24年度からは共用リポジトリJAIRO Cloud も運用が開始され、ますます多くの大学で機関リポジトリが構築されることが期待されます。また、お話の中で「オープンアクセスの推進が重要」と確認されたことが印象的でした。

<レポート：小笠原静華（大阪大学）／坂本祐一（大阪大学）>

安達淳（国立情報学研究所）「学術機関リポジトリ構築連携支援事業の7年を振り返る」

Session.2 多様化するコンテンツ



「多様化するコンテンツ」と題し、特色ある機関リポジトリの取り組みを行っている4機関より発表がありました。今回、発表があった機関リポジトリで公開されているコンテンツは「医療機関発行誌」「歴史的学術文献」「授業教材」「委託事業成果物」と多岐にわたります。それぞれの大学が所有する特色ある貴重なコンテンツは、まさしく“ikor”（アイヌ語で宝物）。これらを世界に公開していくことは非常に大切な事業だと思います。また、それぞれの大学の特色を活かしたコンテンツを登録することで、大学内外での“機関リポジトリ”の知名度向上につながるのではないかと感じました。

<レポート：小笠原静華（大阪大学）／坂本祐一（大阪大学）>

コーディネータ：入江伸（慶應義塾大学）

池崎康（札幌医科大学）「北海道地域医療リポジトリについて～札幌医科大学機関リポジトリ ikor のあゆみ～」

鈴木恵津子（東京家政大学）「東京家政大学機関リポジトリ - 大学の歴史的資料と学内連携 -」

森上豊子（大阪女学院大学）「特色あるコンテンツで新たな連携を ～大阪女学院学術機関リポジトリ～」

萩尾美香（別府大学）「別府大学における動画公開と今後の展開」



登壇者から一言

本学リポジトリBUILDの動画は、まだまだ登録数も少なく、様々な問題に対して試行錯誤しながらの作業で進めております。動画の登録を検討されている大学様もたくさんいらっしゃるようでしたので、演奏・演劇的なストーリーミング（YouTube形式）のもの、図表を含む文献としての要素をもつチャプターで分割したものなど目的に応じた動画モデルが形成されていけば、登録拡大につながるのではないのでしょうか。（ところで、動画はJAIROの「資料の種別」やハーベストは、どのような扱いになっているのでしょうか？）

萩尾美香（別府大学）

CSI 委託事業とは…

CSIとはCyber Science Infrastructure（最先端学術情報基盤）の略で、国立情報学研究所が、次世代学術コンテンツ基盤の構築を実現するために展開している様々な委託事業のことじゃ。その事業の一つに平成17年度に始まった「学術機関リポジトリ構築の支援」があるんじや。これまでにCSI委託事業の契約をした機関は110以上、共同リポジトリを含めた機関リポジトリ設置機関数にいたっては200以上、本文が登録されたコンテンツ数はなんと100万件を突破するなど、着実な成果を上げておるのう。

学術機関リポジトリ構築連携支援事業
<http://www.nii.ac.jp/irp/>





「進展するシステム／データ連携」と題し、機関リポジトリをさらに便利にする先進的なアイデアについて3つのプロジェクトより発表がありました。1つめの「著者識別子（名寄せ）」は、著者に識別子を与えることによって、同一著者の著作物を一覧できるようにするというシステム。2つめの「電子出版・リポジトリ連携」は学術コミュニティが容易に電子出版を行うことを実現し、リポジトリとの連携を可能にするシステム。3つめの「遺跡資料リポジトリ」は、発行部数の少ない遺跡資料に特化したサブジェクトリポジトリ。すべてが既存のリポジトリに付加価値をもたせる画期的なアイデアだと思います。

<レポート：小笠原静華（大阪大学）／坂本祐一（大阪大学）>

コーディネータ：山地一禎（国立情報学研究所）
守本瞬（金沢大学）「著者の識別に向けて オープンアクセス環境下における同定機能導入のための恒久識別子実証実験」
山本哲也（名古屋大学）「クラウド環境における電子出版・リポジトリ連携実証実験」
福山栄作（島根大学）「文化遺産の記録をすべての人々へ！」



登壇者から一言

著者識別子を入力することは、もはやあたりまえのことだと思います。さあ今こそは始める時です。月刊DRF29号も見てね。（会場が暗すぎて聴衆の顔がよく見えませんでした。）

守本瞬（金沢大学）

皆様の指摘がキビシク、時間が長かったです。

山本哲也（名古屋大学）

遺跡資料リポジトリは特殊なリポジトリで「どこでも」というわけにはいかないのですが、サブジェクトリポジトリを行ううえで参考にしていただければと思います。サーバモデルが複雑になってきていてわかりにくいところがありますが、最終モデルではすっきりするはずです。未参加県域大様の参加をお待ちしています！

福山栄作（島根大学）



Session.4 成長するコミュニティ



機関リポジトリに関するコミュニティが着々と成長を続けていることを実感することが出来ました。しかしその一方で、依然として学内での普及が十分ではないという認識を持つ大学も数多くあることが、質疑において明らかとなりました。機関リポジトリコミュニティの成長を歓ぶと同時に、その成長に併せて、大学レベルでのコンテンツ提供の義務化を含めた、各機関内の機関リポジトリの更なる基盤作りの必要性も改めて感じさせられたセッションでした。

<レポート：高橋欣瑛（小樽商科大学）>

コーディネータ：米澤誠（東北大学）
三隅健一（北海道大学）「機関リポジトリコミュニティ活性化のための情報共有」
芝野朋子（龍谷大学図書館事務部）「近畿における機関リポジトリコミュニティ形成の支援（近畿領域3プロジェクト）」
大園岳雄（香川大学学術室情報図書グループ）「香川共同リポジトリプロジェクトの現状と課題」



登壇者から一言

コミュニティにはまだまだチャレンジできることがあると感じました。そう思えるのも、DRF には、様々な人がいて、様々なリポジトリがあるからです。具体的に何をするとすくぐには思いつかないですが、これからもよろしくお願いいたします。（オレンジ色のバンダナはオープンアクセスカラーでした。）

三隅健一（北海道大学）

DRF の活動はCSI 委託終了後もIR 運営にとってのインフラとなるものだと考えています。今後もずっと継続して下さい。（私はひとりアホな発表をしてしまいまして、全国にアホをさらしてしまいました。申し訳ありません。）フロアからのご質問がほとんどなかったのがさみしいです。

芝野朋子（龍谷大学）

大学以外の機関でもリポジトリのシステムを活用した情報発信が広がればいいなあ。世界に広げよう！オープンアクセスの輪っ！
大園岳雄（香川大学）



学術機関リポジトリ構築連携支援事業のホームページで、当日の発表資料・ポスター・スライド（一部）が公開されています！
<http://www.nii.ac.jp/irp/event/2012/debrief/>



1分という非常に限られた時間の中で、各機関が工夫を凝らした発表をされており、時には笑いも起こる、にこやかな雰囲気の中で行われました。発表では、各機関リポジトリの確かな成長が伺え、地域によって特色の異なる、機関リポジトリの多様性に変驚かされました。信州大学がホスト機関を務める信州共同リポジトリ（JAIR Cloud 環境下での地域共同リポジトリとしては日本初）の公開や、中部大学のリポジトリ公開論文をOPAC から検索可能にするシステムの開発などが印象に残りました。各機関が互いに協力し合いながらも、競い合い、切磋琢磨している雰囲気が伝わり、国内の機関リポジトリ業界全体の盛り上がりを感じました。

<レポート：高橋欣瑛（小樽商科大学）>

北海道大学／弘前大学／茨城大学／東京大学／新潟大学／上越教育大学／福井大学／信州大学／滋賀大学／京都教育大学／琉球大学／青森県立保健大学／山梨県立大学／大阪市立大学／城西大学／文教大学／聖学院大学／慶應義塾大学／専修大学／神奈川大学／相山女学園大学／中部大学／京都ノートルダム女子大学／追手門大学／奈良大学／広島経済大学／志学館大学／核融合科学研究所／国立民族学博物館



登壇者から一言

一人一分というリレー形式の報告ははじめてだったので、報告をする方としてはとても緊張しましたが、聞く方としては発表時間が短いからこそ様々な機関の報告が聞くことができたと思うので、とてもよかったと思っています。

恒次知美（専修大学）



リポジトリを立ち上げた機関が増えてきて、いろいろな事例を聞けるのは参考になるという意味で、ありがたいことです。こちらは普通にポスターを作りましたが、となりの聖学院大学の三次元ポスターにはびっくり！

鈴木正紀（文教大学）



個性豊かなポスターが多く見られました。

行木孝夫（北海道大学）

色々な機関のリポジトリ活動を見聞きできてよかった。参考にできそうな活動があったのでまねしたい。

下城陽介（上越教育大学）

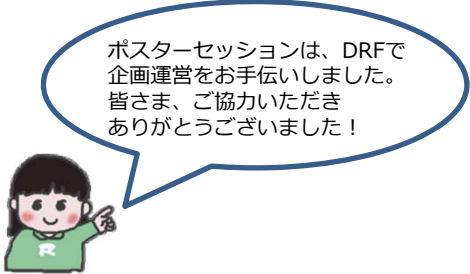
時間が1分なのはよかった。すぐにおわるので。全体ではそれでも長くなるので、その点でもよかった。

小松陽一（東京大学）



来年はもっと実のある報告ができればと思います。昨年度のように自由にまかせるより、全機関にアピールの場を与えるという意味でよいと思います。

斎藤香織（弘前大学）



ポスターセッションは、DRFで企画運営をお手伝いしました。皆さま、ご協力いただきありがとうございました！

どの機関もとても工夫されたポスターだったと思います。1分という短い時間での報告でしたが、とても簡潔でまとまった内容でした。それぞれ短い発表でしたので、スライドを見る時間がなかったのが残念でした。

鎌下昭子（志学館大学）

ポスター展示と交流会が一体化したためか、ポスター（H23成果）に対するQAが不活発の印象があります。

力石浩孝（核融合科学研究所）





機関リポジトリを支える「人材」「評価方法」「著作権」「コンテンツ収集法」「共用リポジトリ」という5つの基盤サービスに関する取り組みについて発表がありました。これらの基盤のいずれかが欠けても機関リポジトリは成立しえないと感じました。NII やDRF による各研修で担当者が育成され、多機関で等基準のアクセスログ活用が可能になり（ROAT プロジェクト）、学協会の著作権ポリシーが明確にされ（SCPJ プロジェクト）、文献自動収集・登録ワークフローシステムの開発でコンテンツの効率的収集がなされ、JAIR Cloud によって機関リポジトリ構築が促進される、というように、各基盤が順調に絶妙に絡み合っ機関リポジトリの発展につながる事が理想だと思いました。

コーディネータ：逸村裕（筑波大学）
濱知美（広島大学）「機関リポジトリ担当者の人材育成」
武内八重子（千葉大学）「ROATプロジェクトがめざすもの」
真中孝行（筑波大学）「オープンアクセスとセルフ・アーカイビングに関する著作権マネジメント・プロジェクト（SCPJプロジェクト3）」
馬場謙介（九州大学）「文献自動収集・登録ワークフローシステムの開発」
山地一禎（国立情報学研究所）「国立情報学研究所の基盤サービス JAIR Cloud（共用リポジトリ）の例」

<レポート：谷奈穂（千葉大学）>

 登壇者から一言

このセッションは「求められる基盤サービス」ということで、内容も充実し、質疑も活発でした。もう少し時間を延ばせば、と思ったところでありました。
逸村裕（筑波大学）

「キャラが濃いメンバーですね（笑）」と言われましたが、内容も濃かったと思います！プロジェクト同士の連携も考えられてきていて、プロジェクトも人のつながりも広がりそうですね。
濱知美（広島大学）

ヒトもシステムも便利なツールも、リポジトリの基盤ですよ。うん。
武内八重子（千葉大学）

Session.7 パネルディスカッション「機関リポジトリの新たなステージに向けて」



「機関リポジトリへの論文登録公開の義務化」「学術情報流通の電子化」「オープンアクセスメガジャーナルと機関リポジトリ」「第3期CSI 委託事業終了後のNII の方針」の4つのテーマについて、会場も交えて活発なディスカッションが交わされました。特に義務化については何らかのメリット（機関アピール、業績の検索容易化等）に繋がる必要があるという考えや、義務化のレベルの検討が必要という見方に加え、そもそも義務という感覚無く「やるもの」と思っていたという声や、義務化を唱えて制度を作っても結局草の根のアドボカシーが欠けていれば無意味という考えまで様々な意見が飛び交い、非常に興味深いセッションとなりました。また、最後に尾城学術基盤推進部次長から発せられた「第3期CSI 委託事業が終了するとはいえ機関リポジトリの支援はNII の重要な事業の一つととらえている」「DRF と地域共同リポジトリはCSI の貴重な財産」という力強い言葉は、会場にいた多くの関係者の胸に響いたことと思います。

コーディネータ：竹内比呂也（千葉大学）
神崎浩（岡山大学）
逸村裕（筑波大学）
杉田茂樹（小樽商科大学）
尾城孝一（国立情報学研究所）

<レポート：谷奈穂（千葉大学）>

 登壇者から一言

義務化、オープンアクセスメガジャーナル、学術情報基盤としての位置づけなど、どう考えてもバラバラのお題ではありましたが、それぞれのパネラーの方がそれぞれの視点で大変興味深いお話をお聞かせくださり、また大変有意義な問題提起をしてくださったので、コーディネータの不備を補ってあまりあるディスカッションになったと思います。聴衆のみなさんが、このディスカッションでまかれた種を受け取り、それぞれの機関で、その機関に合うように育て、学術情報基盤の強化につながる活動に役立ててください。
竹内比呂也（千葉大学）

私がパネルディスカッションで発言させていただきましたように、図書館員、大学執行部、図書館ユーザー（教員及び学生）の3者がお互いに良く理解し合えるようになればそれぞれの大学でより有効な図書館活動が推進されると思います。図書館が必要であること、機関リポジトリが必要であることをそれぞれの立場で理解できるようになればと思っています。
神崎浩（岡山大学）

CSI 7周年おめでとうございます。各リポジトリは、這って立ち、立って歩いて、小学一年生というところ。遡及電子化による初期構築をほぼ終えて、毎日執筆される論文をどうやって捕捉していくか、これからが本当の正念場です。「紀要が充実しているのが日本のIRの特徴」などよく言われるのを聞きますが、そうした浅薄な現状追認結果論にまどわされず、先生方の日々の研究活動、“我が大学のイマ”を輪切りに表現できるよう、引き続きがんばっていきましょう！パネルではOA誌の発展についてご紹介しました。PLoS ONE、eLife、PeerJ、7年前には思いもよらなかった進化です。購読型ジャーナルが死滅しない限りグリーンOAの意義は失われることはありません。でも大学・研究機関図書館としては、学術情報流通全体に目配りが必要。DRF もフォローしますので、そちらもウォッチしていきましょう！
杉田茂樹（小樽商科大学）

DRF 機関リポジトリ新任担当者研修 プログラム決定！！

<1日目>

13:10 - 13:50 オープンアクセスと機関リポジトリの概要
13:50 - 14:30 機関リポジトリの構築
14:45 - 15:20 広報・コンテンツ収集
15:20 - 16:00 事例紹介・模擬プレゼン
16:10 - 17:00 著作権概論・実習
情報交換会

<2日目>

09:30 - 10:10 メタデータ概論
10:15 - 11:10 コンテンツ登録実習
11:20 - 11:50 機関リポジトリの公開
13:00 - 15:05 グループ討議（休憩含む）
15:05 - 16:20 グループ発表
16:20 - 16:50 講評・質疑応答

筑波会場の参加申し込み受付中！
締め切りは7月22日(日)
先着順となりますのでお早めに！

- ✓ 第1回筑波会場の開催日は8月23日（木）～24日（金）です。
- ✓ 最新情報、参加申し込みについては、DRF-wiki をご覧ください。
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?training>



DRFmed-MIS29:DRF主題ワークショップ（医学・看護学）

「リポジトリで発信する医療情報-病院図書館との連携-」

2012. 08. 26 10:45- 第29回医学情報サービス研究大会@聖路加看護大学

現在、医学系大学図書館において、病院誌や看護研究誌などに掲載されている文献への需要が高くなる一方で、発行部数、寄贈先の限定などの理由により、それらの入手は非常に困難となっています。この状況を解消するためには、病院図書館側の協力が不可欠ですが、解消するための有効な手段があまりありません。そこで今回のワークショップでは、その解消手段の一つとして、現在大学図書館等で導

入が進んでいる機関リポジトリを紹介し、事例報告や意見交換を行います。具体的には、病院誌、看護研究誌などが求められるケース（現場からの声 ※特にILL担当者）の事例報告や、機関リポジトリの便利な活用事例、そして小規模な図書館が参入しやすい運用モデルとして、複数機関が共同運用する「共同リポジトリ」の紹介などを予定しています。

MIS29 の申込、プログラムは：<http://mis.umin.jp/29/index.html> ※7月27日（金）までは早期申込割引があります！

Topics.2 DRF ワーキンググループ 初顔合わせ

平成24年6月13日（水）のCSI 委託事業報告交流会終了後、DRF ワーキンググループの初顔合わせを行いました。自己紹介に続いて、今年度における各グループの活動予定や進捗状況について情報を共有しました。「あなたが、あの〇〇さんですね。」と、いつもメールでやり取りしているメンバーの顔と名前が初めて一致し、さながらオフ会のようなお互いをより身近に感じ、結束力が強まりました。「本当に全部やるの?!」と思わず声が出てしまったほど、今年も熱いイベントや新たな計画・挑戦が盛りだくさん。Don't miss it !!



次号
予告

【大特集！】
Open Repositories 2012 ほか

月刊DRF 読者アンケート回答受付中！

30号を迎えた本誌、誌面作りにご意見をお寄せ下さい。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

編集後記：

本文ありのコンテンツが国内で100万件突破。報告交流会でも、オープンアクセスの重要性が改めて語られました。この記念碑的な数字を越えて、わたしたちが真摯に考え行動をつづけることで、更なる機関リポジトリの充実・研究成果発信についての共通理解が進められることを信じています。「機関リポジトリの新たなステージに向けて」歩んでいきましょう！

月刊DRF では、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/> 月刊DRF 第30号 平成24年7月2日発行 デジタルリポジトリ連合